

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

木曾SSO

2012

春

Vol.82

平成24年

地域の歴史

水郷の景観を色濃く残す愛西市
(旧八開村)

地域の治水・利水施設

佐屋川河道の変遷

歴史記録

高須輪中の排水管理 第二編

高須輪中の排水機場設置

研究資料

諸戸 靖

資料館所蔵の一枚の絵図から





水郷の景観を色濃く残す愛西市 (旧八開村)

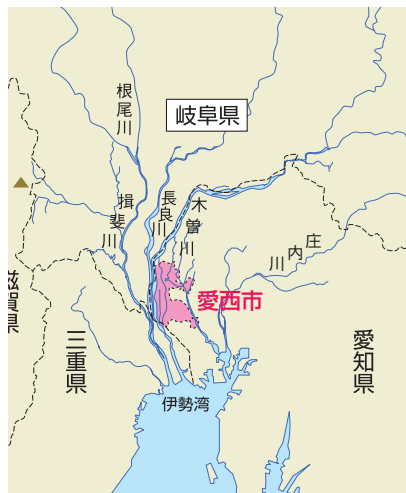
愛西市の北西部は、かつて八開村と呼ばれた地域で、木曾川に面した水郷の村でした。近世には、御開堤が地域の中央を南北に縦断しており、堤内地と堤外地では利水・治水について全く事情が異なっていました。

木曾川左岸の農業地帯



木曾川堤防より旧八開村地域を望む

愛西市は、愛知県北西部木曾川左岸に位置し、二〇〇五年四月一日に、海部郡佐屋町、立田村、八開村、佐織町の二町二村が合併し発足しました。隣接する津島市を北西と南から囲む様な地形となっており、市南部の大半は海抜ゼロメートル地帯となっています。今回は北西部の旧八開村地区を中心に取り上げていきます。当地域は木曾川左岸の自然堤防上に集落が形成された水郷地帯で、肥沃な平坦地に農業が発展してきました。



当地域で人の居住が始まった時期については、弥生時代の後期から古墳時代初期とされています。定納遺跡(二子町)は、旧佐屋川左岸河川敷と旧領内川右岸沿いの二ヶ所から弥



宇太志神社

生時代後期と古墳時代の土器が多量に発掘されており、尾張南西部の考古学上第一級の史料となっています。古代律令制下では尾張国海部郡に属していたと推定され、「和名類聚抄」に記載された物忌郷が当地域に当たるものとされています。古代の土地区画制度である条里制は安定した収穫が見込まれる土地で行われ、尾張国海部郡では現在のあま市や津島市東部な

どにその遺構が見られますが、洪水の多い当地域では条里制は行われなかったと思われます。延喜式内社として鶴多須の宇太志神社が記載されています。

大成荘と立石御厨

律令制が揺らぎ土地の私有が認められると、各地で荘園が発達しました。当地域では大成荘がありまし

た。多度神社の神宮寺(法雲寺)は延暦二〇年(八〇一)に海部郡に壘田一町三反と荒地や葦原三四町九反余を所有しており、その一部が大成荘として開墾されました。神宮寺は当初延暦寺(天台宗)の別院でしたが、承和七年(八四〇)に東寺(真言宗)の別院となったため、大成荘の帰属について永年争いが続きました。大成荘は正平一七年(一三六二)以降は土岐氏の支配地となりました。

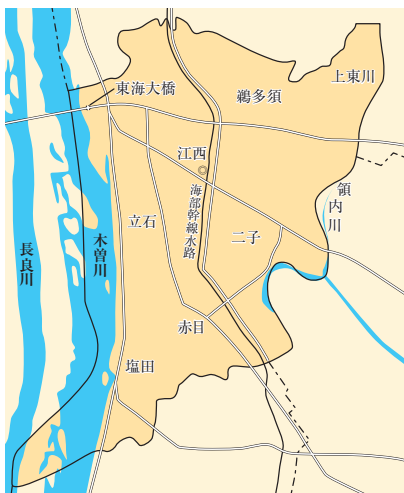
また、当地域には立石御厨という伊勢神宮の所有する領地がありまし

た。立石御厨は往古から神領であったものが、嘉保三年(一〇九六)改めて御厨となり、内宮・外宮に糸や絹布を献上していました。鎌倉時代末期の史料に、立石御厨には田畑はなく、三五〇町全て未墾地で、草萱を刈って年貢に備えたとあります。立石御厨は一五世紀半ばまで神宮領として存続していました。

御開堤の堤内地と堤外地

関ヶ原の戦いに勝利して天下を掌握した徳川家康は、慶長一二年(一六〇七)第九子義直を尾張藩主とし、伊奈備前守忠次に命じて木曾川左岸に大堤防の築造を命じました。御開堤と呼ばれるこの堤防の築造の目的・内容は、

- 一、木曾川を整備し、尾張領の洪水被害を防止する。
- 二、尾張を流れる木曾川派川を締め切って水害を防止し、締め切った河道跡の開発を図る。



旧八開村地域



旧佐屋川左岸堤通り

三、木曾川に取水枳を設け、用水網を整備して尾張平野の灌漑・利水の向上を図る。
ことで、他に、対西国防御や木曾川舟運の向上などが意図されたといわれています。

工事は、慶長一三年着工、慶長一四年（一五年とする説もあり）完成しました。

御開堤の位置については特に下流部について諸説ありますが、犬山から木曾川本流左岸を通り佐屋川（今は廃川）左岸を経て弥富市前ヶ須に至った説が有力です。

旧八開村域は、中央を南北に御開堤が縦断していましたが、その東側（佐屋川左岸）は堤内地で、明治三〇年の鵜多須切れまで水害のなかった地域でした。反対に西側（佐屋川右岸）は

堤外地で木曾川に面していたのでたびたび水害に悩まされ、寛永元年（一六二四）神明津輪中から一二km南の船頭平・大森（愛西市・旧立田村）まで堤防が築かれ立田輪中が形成されました。

御開堤の内外では水田の灌漑用水の確保も大きく事情が異なりました。佐屋川左岸の鵜多須・東川・二子・古赤目の各村と領内流新田は、宮田用水の奥村系統奥村井筋組に属していました。奥村井筋は、木曾川の水を大野村（江南市）で取水している大江川幹線に用水路を新設・接続した井筋です。

一方、神明津輪中の川北、立田輪中の藤ヶ瀬・給父・高畑・江西・元赤目・赤目・立石・下大牧・塩田・町野各村の灌漑用水は「天水待」でした。天水待は雨水頼みという意味ではなく、川の水位が潮の干満によって上下するのを利用した取水方式で、水田面より川の水位が高くなる満潮時に、枳門を開いて川水を導流しました。

立田輪中は北から南に緩やかに傾斜した地形で、北部地域の村に必要な水量を川から取水すると、南部地域の村で排水が追いつかず冠水し、南部地域の必要量に抑えれば北部地域で渇水・干害となりました。こうした状況で、南部地域の冠水防止が優先され、当地域を含む北部地域で

は用水が不足しがちでした。地

形としては低湿地であって

も、田植えの時期や

稲の成長期に

十分な水が得

られなければ

干害となるの

で、北部地域

では掘

抜井戸を掘って

用水を確保するよう



堤外地の現状（立石）



堤内地の現状（鵜多須）

ても掘替えしないことなどの取り決めがなされていました。掘抜井戸は、南部地域の村にとっては水害につながる危険な存在でした。

治水安全度の向上と農業の近代化

明治三二年（一八八九）の市制町村制施行によって、当地域は開治町・八輪村・六ツ和村となり、明治三九年（一九〇六）開治村・八輪村・六ツ和村（一部）が合併して八開村が誕生しました。水害に悩まされてきた輪中地域は、木曾三川分流工事によって、藤ヶ瀬・給父・高畑・下大牧・塩田の一部が川底に没しましたが、破堤による水害の心配が無くなり、昭和二五年（一九五〇）以降は排水機の設定によって湛水による被害も無くなりました。昭和四三年（一九六八）から耕地整理が始まり農業の機械化・農道整備が進み、様々な農業振興策の適応を受けて農業の近代化が図られてきました。

参考文献

- 『八開村史 通史編』八開村 平成二二年
- 『愛知県の地名』平成元年 平凡社
- 『日本地名大辞典・愛知県』昭和五五年 角川書店

地域の 治水・利水 施設

佐屋川河道の変遷

佐屋川の概要

明治三二年（一八九九）に締め切られる以前の佐屋川は、川幅五〇〇～六〇〇mの木曽川下流最大の派川でした。稲沢市祖父江町拾野で木曽川本流から分かれて愛西市を南流し、弥富市で再び木曽川河口部に合流する全長一二km余の河川で、旧八開村では村の中央を南北に縦断していました。

佐屋川については、『岐阜県治水史』に「佐屋川、木曽川が山間部を出でてから七里の距離における第一の派川で、正保三年開鑿されたものであるが、水勢緩慢で土砂を沈殿させることが多く、三大川分流工事の際廃川となった。」と記述されているように、全流路を正保三年（一六四六）に掘り割って造られた人工河川のように言われてきました。しかし、これだけの大河が短期間で開削されたものとは考えにくく、その成立については諸説あります。本稿では、『八開村史』

の見解に基づいて成立過程を記述していきます。

佐屋川の始まり

古来、海部郡には、木曽川の三大派川である三宅川と萩原川が合流して津島を流れる川筋があり、天王川あるいは津島川・善太川と呼ばれていました。さらに、海部郡八開村二子を南に流れる領内川が津島の下流で天王川に合流しており、合流地点より下流が佐屋川と呼ばれていたと推察されています。（図1）



図1 佐屋川の始まり想定図

慶長年間に御囲堤が築かれた当時は、だいたいこの様に河川が流れていたと思われます。御囲堤の完成によって、三宅川・萩原川は分流域で締め切られ、水勢を失って悪水路となりました。一方、派川を締め切られた木曽川本流の水量は増大し、長良川との合流地より下流の地域にとつては水害の増加につながり、早急な緩和対策が必要となりました。

尾張国側では、領内川に木曽・長良川の水の一部を流す河道が開削されました。史料（山田家文書）によれば、「長良木曽一川にて、水溢れ候とて、神明津前、藤ヶ瀬北より東へ鵜多須西を南へ落伏村東、高場前迄掘割、善太川へ分水落候事」と



図2 元和3年頃の佐屋川図

地域の治水・利水施設

明治三二年（一八九九）に廃川となった佐屋川は、近世では本流として扱われるほどの大河でした。木曽川本流の水量を減らすために開削された人工河川と言われてきましたが、その成り立ちにはいくつかの説があります。

あります。高場は領内川左岸の鷹場であり、善太川は領内川です。神明津から藤ヶ瀬北へ鵜多須へ二子へと掘り割った河道は、全てが新規に開削されたわけではなく、既存の河川を拡幅・改修した部分も多かったようです。特に神明津～藤ヶ瀬間は、神明津輪中と立田輪中を分ける間の川と呼ばれ、改修以前は東（藤ヶ瀬側）から西（木曽・長良川）に向かっていった流れが、改修によって西から東に変わっています。（図2）

佐屋川上流部の開削

『地方古義』に「尾州四貫村と三拾町野村との間に木曾川分水、上を野田川・トドメキ川と云、末を佐屋川と云」とあり、佐屋川上流は野田川と呼ばれていた。この野田川は、正保三、四年（一六四六〜七）ころ、木曾川筋の拾町野分水から四貫・野田・川北・藤ヶ瀬北東まで掘り割って、元和三年に造られた間之川・鵜多須川筋に接続された河道です。佐屋川と木曾川本流を繋げることで、木曾川の水量の一部を佐屋川に流して本流の緩和を図ったもので、これにより佐屋川全河道が完成しました。（図3）冒頭に記述した正保三年佐屋川開削説は、この上流部の掘割完成の時点を示しています。また、この開削によって拾町野・馬飼・神明津・四貫・西鶴之本・川北は周囲を川で囲まれることとなり神明津輪中が形成されました。

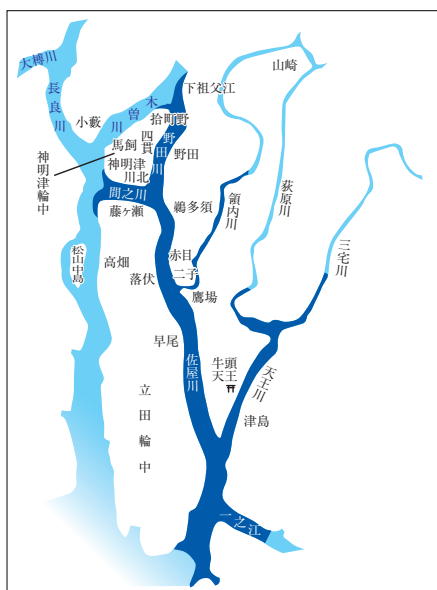


図3 正保4年の佐屋川図

佐屋川舟運の隆盛から廃川まで

「尾張名所図会」では佐屋川を「凡そ六十里の長流にして、川幅甚広く、水のおびた、しき事測りがたく…常に大小の船往来絶ゆる事なく、緋紳の高貴及び西国の諸侯方も、皆此川を通行」と紹介しており、木曾川本流として扱う表現になっています。近世に盛んであった木材の木曾川流送の一部も佐屋川を利用しており、舟運にとっても重要な河川でした。また、東海道の熱田・桑名間（七里の渡し）の脇往還として佐屋路が整備され、寛永十一年（一六三四）に佐屋村に宿場が置かれ、佐屋・桑名間（三里の渡し）の航路が開設されました。佐屋川を下って加路戸川から鰻江川を通り桑名にいたる三里の渡しは、沖を通る七里の渡しと比べ安全で、船旅の時間が短いので、旅客の多くがこの道を選びました。西国大名も参勤交代の道筋に、三里の渡し・佐屋路を選択するものが大半であつたようです。

交通路として重要な役割を果たしてきた佐屋川ですが、木曾川上流から押流される土砂の堆積によって川床が上昇し、幕末には舟運に支障をきたすようになりました。三里の渡しを維持するためたびたび浚渫が行われ、佐屋湊は下流の川平（弥富市）に移転して運用されましたが、明治



尾張名所図会 - 佐屋川宿

五年（一八七二）には前ヶ須（弥富市）に移り佐屋宿は廃止となりました。

土砂の堆積が進み、流量が減少した佐屋川は、明治の木曾川下流改修工事で廃川とすることになり、明治三二年（一八九九）上流分派点の拾町野で締め切られました。

佐屋川用水から木曾川用水へ

佐屋川の締め切りに伴って、川の水を灌漑用水に使っていた地域の用水確保のため、締め切り地点より一・二km下流の馬飼に取水樋管を設置して、これより川北までの二・九kmを開削し佐屋川旧河道に繋げた佐屋川用水が造られました。

佐屋川用水は地域の利水に大きく貢献しましたが、用排水兼用水路で

あり、用水不足や湛水の被害を受けることがしばしばありました。こうした中、昭和四三年（一九六八）に木曾川総合用水下流部事業が立ち上げられました。事業の計画・目的は馬飼に取水堰（木曾川大堰）を建設し、愛知県・三重県にわたって木曾川の水を安定供給することでした。堰の建設と並行して、それまであった佐屋川用水を廃した跡地に全長一七km余の海部幹線水路が設けられました。水路は用水路に排水処理水路を併設した二筋分離二重構造で、水路の先から下流各地への送水路・送水管が延伸しており、かつての佐屋川用水より広範囲の下流地域を潤す基幹水路の役割を担っています。



海部幹線水路

参考文献

- 『八開村史 通史編』八開村 平成二二年
- 『佐屋町史』佐屋町 平成八年
- 『愛知県の地名』平成元年 平凡社
- 『木曾三川流域誌』
- 平成四年 建設省中部地方整備局

高須輪中の排水機場設置

はつめじ

揖斐川左岸の海津町萱野から長良川右岸の海津町森下までを繋ぐ潮除堤の南側に輪中が形成される以前、潮除堤の南側は伊勢湾からの潮汐の影響を受ける葦原でありました。

明治初期までこの地の排水は無数の坑で行われ、明治中頃によりやく、坑による自然排水だけではなく、機械排水が始まり、大正期には機械の改良で徐々に排水効率も向上しました。昭和になると、排水施設の充実だけではなく、揖斐・長良川からの取水施設や水路の整備もなされました。

ここでは、高須輪中での機械排水の経過だけに絞って述べます。

一、明治期の悪水排水

寛文一〇年（一六七〇）頃に形成された多芸輪中は西側を津屋川と牧田川に東側を揖斐川に囲まれた輪中です。この輪中南端の養老町大巻地区は揖斐川と津屋川支川の五三川に囲まれ、雨が

数日続くと一面が湖水となる低湿地帯でありました。

明治二八年（一八九五）、多芸輪中下流部の養老町大巻の高柳新田（養老町高柳）に、五三川の悪水を津屋川に排水するため、新潟県に次いでわが国二番目の蒸気機関排水機場（出崎式、現大巻排水機場）が建設されました。

二、高須輪中の排水

(1) 大江川下流部の悪水排水

明治一七年（一八八四）、岐阜県令・小崎利準が大江川流末での排水改良を願い出て、明治二四年（一八九二）の濃尾地震による復旧工事として、同年、内務省直轄で木造樋門（四間樋）が築造されました。

大江川本流の悪水は、上記の木造樋門と元治元年（一八六四）に設置された長さ一六間の大江開門（橋坎）から揖斐川に自然排水されたのですが、樋門も開門も揖斐川の干潮時のわずかな時間だけ開扉するだけで、悪水

は滞留しました。

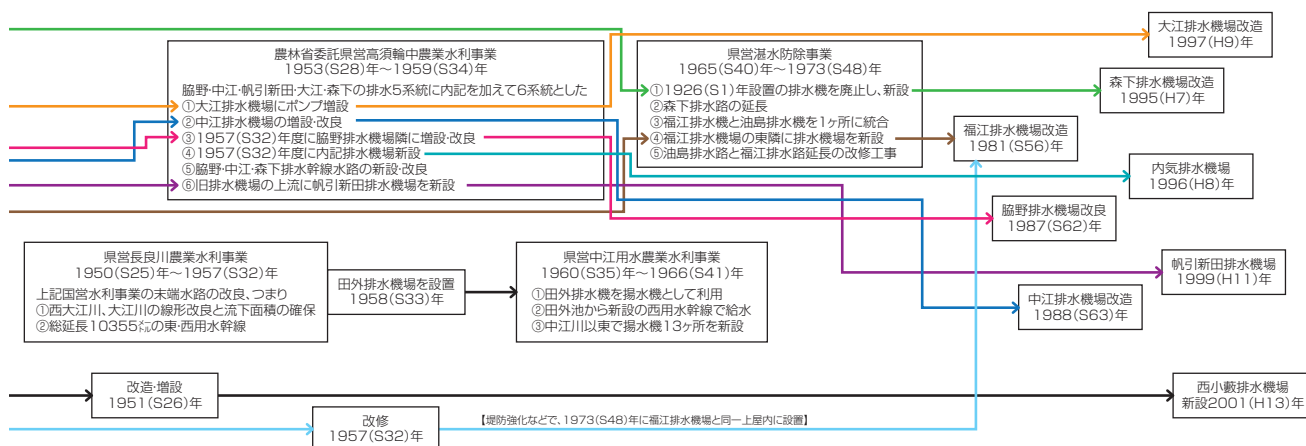
そこで、大江普通水利組合は、明治三九年（一九〇六）七月に下流部の海津町石亀に蒸気機関で鉄製水車の排水機場とその二km程北の海津町札野に石亀とは種類が違ふ蒸気機関で鉄製水車の排水機場を設置しました。

ところが、両排水機場は悪水を大江川に排水するため、排水機の運転は「大江悪水路に設置された木造樋門と大江開門の開扉時間だけ」との条件が付けられ、排水に効果的ではなく、大正一二年（一九二三）には悪水滞留が約一m余りにおよび、稲作の減収は三割余りになりました。

(2) 輪中での排水機設置

高須輪中で最初に設置された排水機場は、明治三六年（一九〇三）七月に完成した海津町万寿新田の中江排水機場です。

中江排水機は九〇馬力の蒸気機関一台と排水量三・八三m³/sの木製水車式揚水機（揚程〇・九一m）で、受





海津市歴史民俗資料館に展示されている福江排水機場の旧ポンプ



排水機場左の燈明は江戸時代から記られている



昔の中江排水機場と記られている燈明

益面積は四・七km²でした。三年後の明治三十九年(一九〇六)六月、排水量は以前と同じで木製水車を鉄製水車二台に替え、蒸気機関も改造されました。

大正期に入り、機器の損傷が甚だしく、能力が低下したので、大正三年(一九一四)七月に旧来のものをすべて廃止して排水量五・三〇m³/sの羽根車式揚水機を設置し、二一〇馬力の蒸気機関二台と渦巻ポンプ四台(揚程二・四m)で、受益面積は一〇・四三km²に倍増しました。

昭和に入り、原動機がディーゼルエンジンからモーターに替わり、昭和六三年(一九八八)には斜流ポンプとモーターが改良され、排水量は設置当初の五倍以上の一九・八三m³/sとなって現在に至っています。

中江排水機場完成から一月後の明治三十九年(一九〇三)八月、福江排水機場(海津町油島)が福江恵水路流末に建設されました。なお、

昭和二年(一九二七)に設置されたポンプは昭和五十六年(一九八一)度の事業によって撤去され、現在、海津町歴史民俗資料館の敷地内に展示保存されています。

中江・福江排水機場の設置から二年後の明治三十八年(一九〇五)、中江排水機場の上流に「西江排水機」の名称で帆引新田排水機場が海津町帆引新田下乃池に建設されました。

明治年代における機械設備は極めて初歩的で故障も多く、耐用年数も短く、その維持管理に多額の経費を費やしたようです。大正時代には原動機がモーターに替わり、排水機場のさらなる設置と改築が平成の時代まで続き、農業生産は排水改良によって大きく増加することとなりました。

三. 大江輪中排水改良事業による排水の進展

大江輪中排水改良事業(大正一四年「一九二五」～昭和四年「一九二九」)は、高須輪中で最初に行われた事業であり、大正一〇年(一九二二)に着工した木曽川上流(大正)改修による排水施設等への影響を改善するために施工されました。

対象区域は、大江川流末の大江閘門から揖斐川に排水する自然排水区域と揖斐川と長良川に排水する低位部での機械排水区域です。

前述した石亀・札野排水機場を廃止して、昭和元年(一九二六)に長良川に排水する森下排水機場(海津町森下)と揖斐川に排水する脇野排水機場(平田町脇野)の二カ所が新設されました。ここで、森下排水機場は一六〇馬力の電動モーター二台、揚程二・九七mのポンプ四台で四・四四m³/sを排水し、脇野排水機場は二二〇馬力モーター一台、揚程三・〇三mのポンプ二台を揚程によって直列と並列とに切り替えて三・〇五m³/sを排水

しました。

さらに、

森下・脇野排水幹支線の設置、大江閘門に至る東・西大江川の浸深などが行われ、流末の

大江閘門は大江川悪水の揖斐川への自然排水と渇水時のアオ取水(塩水上の淡水取水)を目指し



森下排水機場



脇野排水機場

ました。一方、明治三十四年(一九一九)に設置された木造樋門は、大正一三年(一九二四)二月の大江普通水利組合の臨時会で、木造樋門の改造には一五万円の費用が必要のため、「木造樋門は排水機設置と同時に掘潰すこと」と決められました。平成七年(一九九五)に揖斐川左岸堤防から見つけ出された四間樋(後の金廻四間門樋)が、上述の埋め潰された木造樋門です。

なお、現在では考えられないことですが、森下・脇野の排水機設置に

表1

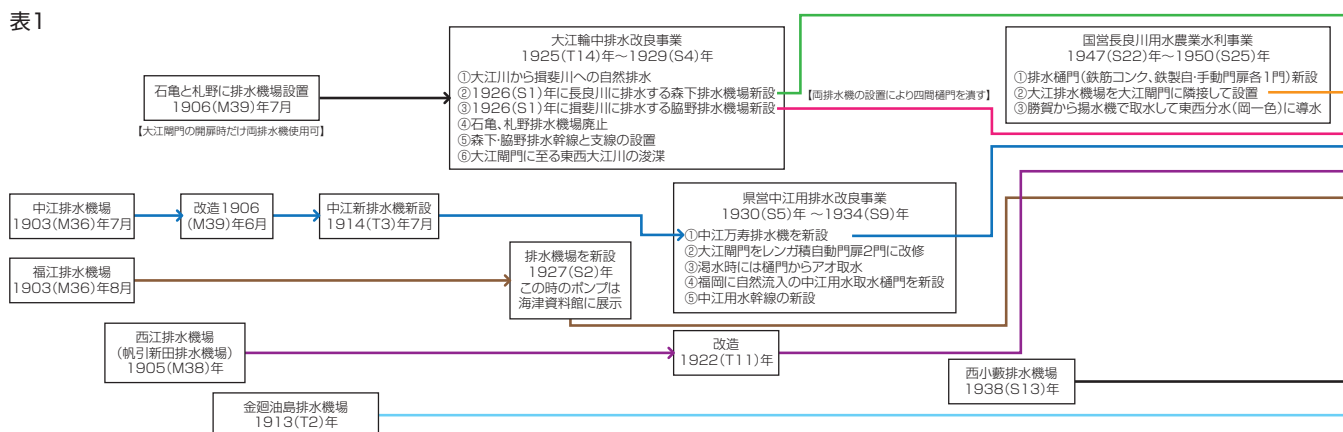




図1 用・排水施設と各幹線水路の概略図

図1は、高須輪中内の用・排水機場と用・排水幹線水路の概略であり、各排水機場が担当する地域は色で識別されています。

現在、輪中内の排水は七ブロックの排水系統で八排水機場によって揖斐・長良川と大江川に排水しており、幹線排水路七・四・五km、支線排水路四七〇・二kmで合計五四四・七kmです。

なお、中江・帆引新田排水機場の二排水機場は合わせて一排水ブロックです。

四・高須輪中排水機場の設置

昭和の中頃まで土地改良区ごとに排水機場が設けられ、営々と排水機場の改良が行われてきました。しかし、これらの排水機場では家屋浸水などの内水被害がしばしば発生しました。特に昭和三六年（一九六一）六月の豪雨では、輪中内の八〇%の地域が約一m湛水。一週間後でも五六%の地域が約〇・七m湛水した状態で、その被害額は一〇億円ほどと推定されました。

このため、内水対策として当時の建設省は、大江川や中江川などの排水河川を整備し、流



高須輪中排水機場

域の集水性を確保して、ポンプ排水する高須輪中排水機場の建設に取り掛かりました。

設置する排水機場の計画排水能力は、昭和三六年（一九六一）の豪雨に対して家屋および主要道路等を浸水させない計画で、ポンプ六台により実揚程六・二〇mで七五m³/sの排水ができるものとなりました。

昭和五四年（一九七九）五月に第一期工事として、土木工事とポンプ三台排水能力三七・五m³/sが完成しました。なお、当地域に六六五mmの降雨があった昭和五一年（一九七六）の九・二災害のとき、当時の高須輪中排水機場にはポンプ一台のみの完成でしたが、このポンプ一台の運転は大いに排水に寄与しました。平成二年（二〇〇〇）度までに五台のポンプ（四台は各一二五〇kWのディゼル機関、一台は二二五〇kWのガスタービン）が設置されました。

五・大江川の水位と排水機操作

大江川は海面より低いため、通常時は大江閘門（樋門）を揖斐川の干潮時に開けて大江川の流水（常時水位はT.P.〇・二五m程度）を排水しており、他の排水地区の内水位は各排水機場から長良・揖斐川へ大江川の水位より低い水位を保ち排水されています。

一方、降雨量が多くなり、大江川の水位がT.P.+〇・〇〇mに上昇す

ると、高須輪中排水機が始動して水位をT.P.〇・八mに維持し、他の排水地区では、各排水機場によって内水位を大江川の水位より低く保ち、内水被害を防いでいます。

おわりに

明治期以前の果てしない川の設置と江下げの後、機械排水が明治三〇年代に入ってから始まり、さらに大正時代に原動機が蒸気機関からモーターに替わり、排水機の性能が徐々に向上してきました。

昭和二〇年代以降、排水機の改造と排水路の浚渫や整備にとどまらず、用水の取水施設や用水路の整備、地震による地盤沈下に対応するための排水機の新設・改良、排水路の改修が加わり、また当時の建設省による内水対策用の高須輪中排水機場も設置されました。高位部での渇水、低位部での悪水滞留など水に苦勞してきた高須輪中は、今では野菜と稲を生産する豊かな土地に大きく変貌したのです。

参考文献

- 『岐阜県治水史下巻』
- 『高須輪中土地改良史（事業史編）』
- 『発行高須輪中土地改良区 平成二二年 用・排水集中システム（冊子）』
- 『発行東海農政局長良川用水農業水利事業所 海津町史 通史編』下巻

際して、地主の排水機維持費負担金は排水改良による利益の軽重を勘案して大きく異なっていました。そこで、大正一四年（一九二五）六月に脇野地区の地主は当時の内務大臣・若槻礼次郎に不均一な排水機の維持費負担について陳情書を提出しています。

この事業を嚆矢として、排水改良事業は対象地域の排水河川の浚渫や排水路の新設、さらに揚水施設と用水幹支川の設置など、取水から用水・排水を考慮した計画が行われるようになりました。

表1は、排水機場の設置と改造の経緯をまとめたものであり、同表には堀田の埋立など土地改良に関する事項は除外してあります。同表には、各排水機場の設置経過が色の違う矢印で示してあります。

研究資料

資料館所蔵の一枚の絵図から

長島輪中の郷館長 諸戸 靖



諸戸 靖氏

1956年(昭和31年)2月13日生まれ。
関西大学文学部史学科卒業後、三重県教職員。
平成2年から長島町(当時)の輪中の郷の建設に関わり、平成5年、輪中の郷完成とともに輪中の郷職員。
平成19年より現職(館長)
著書：三重県史(輪中に関して)、木曾川は語る(共著)。その他雑誌等での著作。
論文：昭和前期の木曾三川下流域(土史学会)

輪中の郷には長島に伝わる古文書、絵図等が保存されている。その中から特徴的な絵図を一枚選び、そこから考えられることや分かることを長島の資料館としての立場から検証したいと思う。

表書きに ふりかへるもの

表書きには、宝暦年間尾濃勢三國之図とあるが、実際には尾張・美濃・伊勢それぞれの国絵図が描かれている



1枚の絵図 全景

わけではなく、現在の木曾三川下流部が描かれている。宝暦年間の長島の開発状況を見ると福井新田の開発が享保一三年(一七二八年)に終わっており、横溝蔵新田がまだ開発されておらず、宝暦七年(一七五七年)に開発されてい

るので、その間に描かれたものとなる。

何のためのもの

絵図の各所に赤い線が描かれており、これらを総合すると宝暦治水の頃のものと考えられる。つまりこれらの線は、工事箇所を意味し、工事の内容を表しているものと考えられる。しかしこの絵図が、長島藩の家老福原家に伝わったものといわれているので、工事の範囲から長島の占める割合は大



写真1

きく、現在長島に残る文書から宝暦治水の様子がわかるものはほとんどなく、この計画図が長島藩の家老家に残っていたことにその意味がある。しかし、長島に残っている江戸時代後期以降の文書には宝暦の治水に関する記述はなく、長島藩がこの工事にどのような関わったのかは不明である。

全体から分かること

さて、この絵図から何が読み取れる

かということについてであるが、まず注目してもらいたいのが、長島輪中の南、木曾三川最下流に形成している島状のものである。通常木曾三川の堆積によって形成される島や州は川の流れて沿って南北に長くなるものであるが、この砂州だけは東西に長く延びている。これは木曾三川によって運ばれた土砂が伊勢湾海流(神島近くから入って黒潮が知多半島に沿って北上し、木曾三川にぶつかり伊勢平野側を南下する反時計回りの海流)にぶつかってこのような形となった。このため、木曾三川の流がせき止められたような形となり、河川の水位が上昇してしまったと考えられる。(写真1)

特に、高須輪中以北では天井川化が進み、悪水の処理に困っていたものが、ますます排水が困難になったと考えられる。そこでこの砂州をよく見ると、ちょうど中央付近に点線が南北に二本入っていることが分かる。この線が何を意味するのか、この絵図全体から見たときに考えてみると、先に書いたように、輪中本来の形状とは別の形の島ができたために排水が困難になった地



写真2

域では、排水をよくするための方法としてとられたのが、河川の幅を広くしたり、川浚えを行い断面を大きくし、流量を増す方法がとられたりしたが、河口に障害物ができたときには、必然的に水位が上昇するため、それを撤去しなければならなくなる。しかし、江戸時代においては専門の機械も、大型の重機もないために大規模な改修工事は、不可能である。この二本の点線は明らかに水を通し木曽三川の水位を下げるためのものと考えられるが、どのように掘削するのだろうか。(河口部の島)この全体図から見ると、この工事の目的は、この島の撤去にあると考えられるから、それぞれの工事箇所から見てどのような目的かを考えたいと思う。

写真3

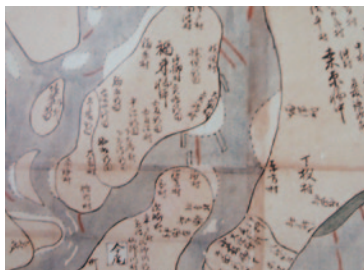


写真4



●逆川の締め切り(写真2)

細部から分かること

周知のように木曽三川は現在でもそれぞれの川の水位は違う。基本的には木曽川が一番高く、長良川、揖斐川の順に低くなっている。このため逆川と呼ばれるこの川は、木曽川の水が長良川に向かって流れ込む川である。長島では昔から「四刻、八刻、十二刻」という言葉が残っており、上流に豪雨があると揖斐川は八時間後、長良川は十六時間後、木曽川は二十四時間後に増水してくるといわれている。すなわち上流で豪雨があると二日以上にわたって各河川は増水し続けるのである。そこで、この逆川は木曽川の増水時には大量の川水を長良川に向けて増

水させることになる。このため墨俣輪中や大垣輪中、場合によっては加納輪中あたりまでが水災に見舞われることになる。そこでこの逆川を締め切ることはなるのだが、単純に締め切るだけでは木曽川と長良川の合流部での洪水の増加は明らかであるため、今も残る桑原輪中の石田や八神などに巨大な猿尾が作られることになる。これらの猿尾は木曽川の水の水はねとし、その先には、佐屋川があり、木曽川の本流を佐屋川に付け替えようとしている。しかし、佐屋川をよく見ると川幅が狭く、ところどころに土砂の堆積による中州や河川敷状の堆積土砂が見られる。また当時は木曽川よりも東に流れる佐屋川は、木曽川よりも河床が高く、木曽川の本流を持つていくには無理があったと考えられる。

●大樽川の締め切り(写真3)

逆川の締め切りと同様に河床の高い長良川から揖斐川へ流れ込む大樽川は、高須輪中や大垣輪中などに大きな影響を及ぼす。その上、養老山脈から揖斐川に流れ出る数多くの川や沢は、養老山脈の土砂を直接揖斐川に流し込むため、この付近で降った雨が他の川よりも多くの中州を形成させたり、場合によっては揖斐川本流をせき止めるという事態も起こる。実際に養老山脈から流れ出した土砂によって揖斐川がせき止められて洪水が発生したという事例も残っている。そのため、長良川の水が揖斐川に流れ込まないようにするための方法としては、大樽川の締め切りが必要となってくる。宝暦治水の

工事の結果としては、伏せこしといって締め切りには違いないが、通常の堤防よりも低い堤防が作られ(洗い堰)、長良川の増水時には越水した水が大樽川に流れ込むようになっていく。しかし、この工事の後何度も作り変えられており、また、うがった見方かもしれないが、この上流の福束・森部・墨俣輪中の間でも長良川と揖斐川が合流しているものの工事の計画がなされていないのは、治水をしてもしなくても洪水の問題がないのか、高須藩と大垣藩、尾張藩領との関係でなされてないかは、今後もう少し詳しく検討していきたいと思う。(写真4)

●油島の食い違い(写真5)

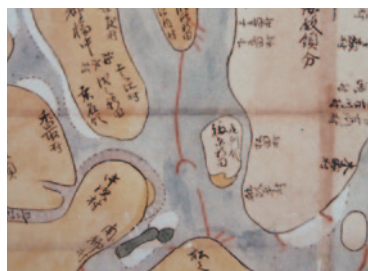


写真5

宝暦の治水工事での最も大きい工事といわれている部分であるが、この松ノ木と油島はともに現在の金廻新田までが長島藩領で伊勢の国の工事となる。全体図から見ても明らかのようにこの食い違い堤をはさんで東側が木曽川と長良川の合流した川で、西側が揖斐川となる。このため、水量もおおく、水位も高い東側を流れる川は、この工事の完成後、相当な勢いで西側の揖斐川に流れ込んでいたものと考えられる。本来ならばこの堤は、食い違いではなく、連続堤防であるほう

が、洪水の軽減といった意味からはよいのだが、当時の技術や水運の重要性から考えても食い違い堤にせざるを得なかったはずである。また食い違いの部分からの決壊を防ぐ意味でも相当な部分は木曽川のように洗い堰になっている。この後、天保年間の絵図をはじめいろいろな時代の絵図が残っているが、それぞれに特徴があり、何度も繰り返し改修が行われていたものと思われる。また、文政年間の絵図からでも食い違い部分八十五間、洗い堰部分二百三十二間、堤防部分五百二十六間となっている。明治時代の測量図からはこれらの部分は直線になっており、食い違いの部分も鍵状に作られている。この堤防が完全に締め切られるのは明治の改修工事によってである。

●猿尾(写真6)



写真6

宝暦治水において、この絵図の中での上記の三点がよくクロースアップされているが、最も多くなされた工事が猿尾と呼ばれる水はね堤防である。宝暦の治水工事といえは、この工事の最大の治水としての考え方が三川に分流であり、基本的には木曽川筋を佐屋川にもつていき、木曽川筋には長良川を流しこむ。揖斐川筋はそのまま直線状に海まで流すことにある。

そこです。今も残る石田の猿尾であるが、これは木曾川の水流をここに当て、佐屋川へ跳ね飛ばすものである。(八神の猿尾も同じと考えられる)そのためにも逆川の締め切りが必要であり、大樽川の締め切りも必要になったわけである。

次に下流部の猿尾を見てみると、木曾川の水流を流芯に向けて流し込むように設計されている。そしてその先には、東西に長く延びた砂州があり、その中央部に向かって流れ込むようになっていく。猿尾の本来の目的は、護岸堤防としての役割だと考えられるが、実際には水流を変えることも考えていたのではないかと考えられる。

総論として

この絵図から何が読み取れるかということになる。絵図全体を見ると最下流にある東西に伸びる砂州が、木曾三川の水流をせき止めていることが分かる。本来下流部の輪中は、川の堆積でできたものがほとんどで、そのため上流から運ばれてきた土砂は南北に長く堆積する。そして輪中の形成も南北に細長く形成されるものが多く、形成された輪中の南部分に新たな土砂の堆積が始まり複合輪中化していくことが多い。しかし、この最下流にできた砂州は、上流から運ばれた土砂が伊勢湾海流(先にも書いたように太平洋から入った黒潮が知多半島に沿って北上し、伊勢湾の最奥で木曾三川とぶつかり伊勢平野沿いを南下する)に沿って形成されたものである。このため東に

大きく西に行くにしたがって縮んでいく。江戸時代後期にはこの砂州が老松輪中となり、巨大な島を形成する。今も大字八百という地名が残っているが、八百町歩以上の大きさになっている。つまり、この時代においてすでに長島輪中や立田輪中、高須輪中など比べても相当な大きさになっていることが分かる。そのため、この砂州の出現によって木曾三川は最下流でせき止められ、木曾三川下流部のすべてで水位が上昇したものと考えられる。この水位の上昇は、輪中内の悪水の排水に支障をきたすことになり、生産物の収穫にも大いに影響を与えた。(写真7)さてこれらのことから、宝暦の治水工事の最大の目的を考えるとこの最下流に出現した巨大な砂州の撤去にあると考えられる。しかし、当時の土木技術ではこの砂州のすべてを撤去すること、ましてや人力で取り崩すことはまず不可能であったに違いない。そこでこの砂州をよく見ると中央部分に南北に直線状の点線を見つけないことができない。この点線は木曾川と長良川を長島輪中の北東部で合流させ、加路戸川(木曾川)に一

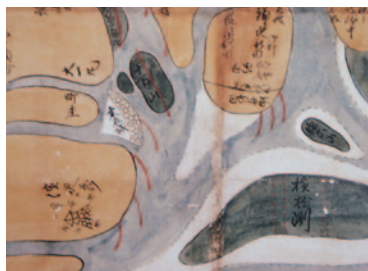


写真7

としたものと考えられる。水力による掘削が成功すれば、木曾三川の水位が下がり、各輪中の排水が容易になる。するとこの絵図に見られる木曾三川の処々に白い部分(土砂の堆積による中州)はより巨大になって各所で川詰まりとなり、場合によっては逆に水位の上昇を招いたり、洪水の原因になったりする場合が出てくる。この絵図の上流から最下流を見ていくと、数多くの猿尾が見られる。これら一つ一つを見ていくと、それらはこの中州を撤去するために設けられたように、見ることでできるのである。また、森部輪中の南北で締め切りが行われなかったのも、水力によるところの中州の撤去にあったのではと考えられる。現在ではほとんど流れのないように見える木曾三川もこの時代には、豊富な水量と流れをたたえていた川であり、巧みに水の力を利用することによって治水を行い、洪水の軽減を図っていたと考えられる。今回は輪中の郷が所蔵するたった一枚の絵図だけで、そこから考えられるものを述べてみた。本来は、この絵図が描かれた前の時代のものや同じように宝暦の治水工事に関係した高木家の文書など、またこの絵図が描かれた後のものなども含めてこの工事を検証していくかなければならないが、木曾三川最下流にある資料館の一枚の絵図だけでも数多くのものを語っている。宝暦治水を考える上では、当時の社会情勢やそれぞれの藩の実情、それぞれの生活まで踏み込んで全体像を明らかにしていきたい。

その他



写真8

長島輪中を見ると、ちょうど真ん中あたりに南北を仕切るような実線が書いてある。(写真8)江戸期にはこの線を境に北の部分を上郷、南の部分を下郷と呼んでいた。このためこの線は長島を上と下に分ける線と考えられているが、実際にはこの線は中堤または中桁と呼ばれ、輪中内には新たに作られた堤防である。輪中は囲い堤の完成で輪中としての機能が果たされるわけであるが、長島輪中の場合は中堤が作られることにより、上郷もしくは下郷の堤防が決壊したときには、どちらかの郷は、水害から守られることになる。ただし記録を見るとあまり大きな堤防ではなかったように、大規模な洪水になると輪中内全域が水没したという記録も残っている。しかし、この堤防ができたことで、基本的には長島城がある下郷のほうを守られるようになり、上郷で決壊し、入水すると同時に上流から肥沃な土砂が堤内に入り、その土砂のみを船などで、下郷に運び入れたといわれている。現在のように水との戦いを行うだけでなく、人為的に水を入れることによって、肥沃な耕地を作り上げていたと考えられる。

流れてきたお薬師さま(八開村)

木曽川に面した八開村には上流から流れてきた仏さまの話がいくつも残っています。
給父に祀られているお薬師さまの由来もその一つです。

昔、木曽川が大洪水になり、川の水がどんどん増えて、今にも堤防を超えそうな勢いでした。
渦を巻くように下る濁流の中を、上流の山からたくさんの木が流されてきました。

この様子を長念寺の老僧が堤防の上から見つめていたところ、流木の中に黄金色に光る木をみつけました。不思議に思った僧が手招きすると、木は流れに逆らうように川を横切つて僧の足元まで流れ着きました。

この木でお薬師さまを彫つて祀つたところ、おこりが流行らなくなつたそうです。

鶴多須のお薬師さまは、円空作とも言われています。

すっかり日が暮れ畑仕事から帰ろうとしたおじいさんが、佐屋川で道具を洗っていると、木片が流れてきて鍬にコツンとあたりました。
おじいさんは木片を拾いましたが、あたりが暗かつたので良く見えないまま家に持つて帰りました。
翌朝、明るくなって見ると木彫りの仏様であつたので、家でお祀りすることにしました。

*おこり 間欠的に発熱し、悪寒(おかん)や震えを発する病氣。
主にマリアの種。



木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。

船頭平開門
木曽川文庫



《開館時間》

午前8時30分～午後4時30分

《休館日》

毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

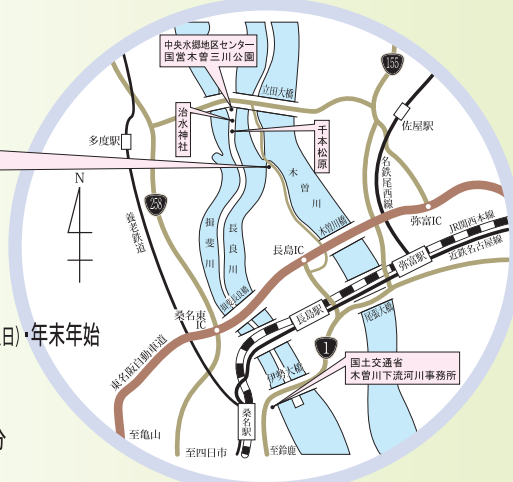
《入館料》無料

《交通機関》

国道1号尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分



KISSOホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

木曽川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原

TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166

Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp

編集後記

歴史記録は、「高須輪中の排水管理」の2回目を特集しました。研究資料では、輪中の郷館長の諸戸氏に寄稿いただきました。

なお、この資料は、創刊号からの全てがKISSOホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上

「木曽川越しに伊吹山を望む」

旧八開村からは、北西に伊吹山が見えます。雪を冠した冬の伊吹山は、青空に映えて一層神々しく感じられます。

中

「長念寺」

東海大橋のたもとに「水にまつわる民話」に出てくる長念寺があります。本堂は近年の建造ですが、山門や鐘楼に往時が偲ばれる古刹です。

下

「東海大橋」

愛西市給父町と海津市秋江を結ぶワーレントラス橋。堤防の脇にこの橋の完成によって廃止となった「給父の渡し」跡の案内板が立てられています。